

令和5年度 第1回 総合教育会議議事録

日時 令和5年8月21日（月）午後2時～

場所 いわき市体験型経済教育施設Elem（エリム）

第1回総合教育会議 議事録

- 1 日時 令和5年8月21日（月） 午後2時～午後3時30分
 - 2 場所 いわき市体験型経済教育施設Elem(エリム)
 - 3 出席者 いわき市長 内田 広之
いわき市教育長 服部 樹理
いわき市教育委員会 委員 馬目 順一
いわき市教育委員会 委員 宮澤 美智子
いわき市教育委員会 委員 小峰 美保子
 - 4 欠席者 いわき市教育委員会 委員 根本 紀太郎
 - 5 内容 (1) 報告事項「教育政策の情報発信について」
(2) 協議事項「学力向上策の取組みについて」
(ゲストスピーカー)
高橋 洋平氏（鎌倉市教育委員会教育長）
(補足説明者)
PwCコンサルティング合同会社
※同社は今年度、いわき市教育委員会から学力分析等の委託を受注している。
-

【会議内容】

- 1 開会
- 2 議事
会議設置要綱第4条の規定により、市長が議長となること、また、同要綱第7条第2項の規定による第1回会議の議事録への署名は、馬目委員及び小峰委員が行うことを確認した。
 - (1) 教育政策の情報発信について
 - ① 事務局説明（教育政策課 寺島課長）
資料1「教育政策の情報発信について」により説明を行った。
 - (2) 学力向上策の取組みについて
 - ① 事務局説明（学校教育課 鈴木課長）
資料2「学力向上策の取組みについて」により説明を行った。

② PwC コンサルティング合同会社説明（公共事業部 林真衣氏）

資料『『いわきの学び』を支える集計・分析・活用システム構築及び授業力向上支援業務について』により説明を行った。

③ 補足説明（神奈川県鎌倉市教育長 高橋洋平氏）

- ・私は2016年から5年間、文部科学省から福島県に出向という形でお世話になり、その際、いわきの先生方にも大変お世話になった。また、PwCの教育チームでも、いわき市と一緒に仕事をしてきた。
- ・鎌倉市も様々な悩みがあり、いわき市と通ずる部分もあるかと思い、本日参加させていただいた。これを契機に、鎌倉市といわき市の連携を深め、両市の教育振興のために手を携えて進んでいきたいと思っている。
- ・教育政策については、内田市長のもと、多岐にわたる施策が展開されており、その発信についても市長や服部教育長のもと、展開されているものと受けとめている。
- ・インパクトがある広報を実施していくことが大事な視点だと思っており、広報というよりは、パブリックリレーションズ（PR）のような考えで、役所から発信することはもちろん、そもそも誰にどのような行動をとって欲しいのかという目的を明確にしながら戦略的にやるべき。
- ・今、鎌倉市ではスクールコラボファンドという寄附の取り組みを進めており、仕組みとしては、市内外の人に寄附を募り、寄与してもらうことを目的として広報活動を行っている。
- ・教育長だよりは、すごく良いアイデアだと思うので、私もぜひ試してみたいと思う。
- ・note^{*}を始めてみたところ、最初は職員が頑張って執筆するが、後々書くのが大変になり、持続性には課題があると思っている。（※文章をメインとした記事コンテンツを発信・共有するサービス）
- ・私は、地元のラジオ局で対談を行い、その内容をYouTubeやPodcastなどにアップしてもらうなどの連携を図っている。
- ・役所側から発出する情報もしかり、マスコミや様々なSNS含め、誰かに発信してもらう、誰かに書いてもらう、誰かに文字化してもらうことが、すごく大事な視点だと思っている。
- ・市役所が自ら発信するのではなく、様々な人の助けを借りながら人々を動かしていくことが大事である。
- ・市役所から発出したものだけだと届く層に限られることから、新聞、テレビ、ラジオなどから伝わってくる情報は、受け取り方が違うものと思っており、そのような媒体との連携を深め、市役所職員の工数も減らしつつ、発信力のある取り組みが必要。
- ・学力向上策についても分厚い施策だと感じた。

- ・ PwC の説明であったダッシュボードを含め、研修や様々な取組みについては、大きい方向性の違和感はなく、ぜひ進めていくべき施策だと改めて感じた。
- ・ 狭い意味での学力ではなく、教育データをどのように利活用していくのかを議論しなければならない。
- ・ 全国学力調査についても、対象が小学校6年生と中学校3年生、また、調査も限られた教科だったりするので一面的なものではある。
- ・ たかが一面されど一面ではあるので、そこを冷静に受けとめ、内発的な授業や教育の改善サイクルをまわしていけるかが、ポイントだと思っている。
- ・ 競争させることが目的ではないので、先ほどの PwC、教育委員会の先生方が作成した資料のように、子どもがどのような支援が必要なのか、どのようにして伸ばしていくのか、個別最適な学びに向けて授業を練っていく、また個々の子どもたちのケアに役立てていく方が現場には使いやすいデータになるのではないか。
- ・ 福島学力調査については、さらに活用を深めていくべきだと思っている。
- ・ 福島学力調査は IRT[※]というテスト理論を使い、いわゆるパネル調査で子どもを追いかける調査であり、そこで子どもの伸びがわかる。(※項目応答理論)
- ・ 全国学力調査は、小学校で言えば、毎年その年度の小学校6年生が受けるため、去年と比較するのは統計的には間違っているとの指摘もある。
- ・ 福島学力調査は個人の伸びを追っているのが非常に特徴的で、粘り強さや思いやり、諦めない心、そのような非認知能力についても計測できるような調査になっているのは、非常に重要である。
- ・ いわき市の子どもたちの良さ、学校の良さ、強みをうまく可視化して発信できる事業になると素晴らしいと思う。
- ・ 鎌倉も様々な地域があり、中心部の学校の学力は高いが、その学力について、学校が伸ばしているのかどうかは、わからない。
- ・ 子どもの学力は、地域や家庭の経済力など、親の社会関係資本に強く関係があるのは、ここ 20 年ぐらいの教育経済学や教育社会学において研究結果がでている。
- ・ 家庭の経済力や社会関係資本は学力と強い相関関係があり、また、比較的都市部の学校の学力が高い傾向にあるが、その要因は、本当に学校が伸ばした結果なのか、それとも家庭が伸ばした結果なのかが分からない状況である。この部分については、福島では学力調査で分かることから、先生の頑張りが正当に評価できると思う。
- ・ 平均値よりも悪い学校の子どもだったとしても、その 1 年間で伸びた子がいるかもしれないし、その伸びた分をしっかりと正当に評価してあげる冷静な分析が求められる。

- ・ 平均値を比較するだけのデータ利活用にはいけないと思っており、様々な教育データの利活用はこれから進んでいくものと思われる。
- ・ 今回は学力調査の結果を中心に分析していくことになると思うが、学校にはその他のデータも多数あり、指導系のデータだけでなく、管理系のデータ、校務支援システムのデータとか、児童1人にタブレット1台の時代でもあり、いわき市においてはそこから生み出されるデータもある。
- ・ これからどのように戦略的に利用していくかという議論も、この先必要になってくる。
- ・ 校務系システムと指導系システムはネットワークが分離されているが、今、文科省の大きい方向性としてクラウドが標準化されており、校務系と指導系を一つにマージしていくのが、これからの新しい教育データ利活用の世界感だということを明確に示している。
- ・ 学習ポータルやいわき市でも活用している校務支援システムなどのデータ結合については、今後、いろいろと情報交換させていただきたい。
- ・ 先日、つくばにある教職員支援機構の施設で研修教育行政のリーダー研修の講師を務めてきたが、様々な話題があり、先生達のリフレクションや管理職のための学校経営RPDCA、プロセスで理解する学校マネジメントなど、私自身も学ぶことが多かった。
- ・ 内発的な改善力、改善サイクルにより、より良い学校に変化していくために重要な項目は四つあると思っている。
- ・ 一つ目は管理職のリーダーシップ、二つ目は管理職以外のリーダーとなる推進者の存在、三つ目は学力チームの先生方やPwCなどの第三者の存在、四つ目は学校の中で自分ごとのプロジェクトにしていること、この四つが共通していると思っている。この中で管理職のリーダーシップが特に重要だと思っている。
- ・ 前段の四つを推進し、市長が話したように現場から課題を吸い上げ、学校の変革や学力向上策が図られていくと素晴らしい。
- ・ 千々布先生の「先生たちのリフレクション」という本で秋田の事例が取り上げられているが、秋田県は授業のスタンダードを作り、学力向上に全県一丸で取り組み、中身を見ると先生同士がスタンダードを真似するのではなく、そのスタンダードと照らし合わせて自分たちの授業をいかに改善していけるかというのがリフレクションであり、対話を重ねることが根幹であると説明している。
- ・ 今回で言うと、学力向上チームの先生、PwCの研修などの支援が方法論ではなく、データや手法を鏡のように学校側に利用してもらい、自分たちの学校の改善に繋げていくのが本質だと思っている。
- ・ 鎌倉で教育長サロンをやろうと思っているが、月1回、オンラインで鎌倉にいる約900人の先生が誰でも入れるような場を作り、そこで学び合いをしていこうと思っている。

- ・そこで私が何か先生方に教えるのではなく、それぞれが持ち寄ってきた学力向上策や様々なテーマに対するリフレクションを行う場としたい。

(3) ディスカッション

【馬目委員】

- ・私は常々、教育というのはデータを基にその結果をいかに先生が教育に反映させられるかが重要だと思っている。
- ・いわき市ではデータ作成に取り組んでいるが、その成果は極端にすぐに表れるものではないと思う。
- ・先生の生徒に対する対応、生徒の先生に対する考え、この二つを合わせないと教育はなかなかうまく進まない。
- ・総合教育会議資料2の5ページの結果のとおり、小学校6年と中学校3年で、差が表れており、やはり小学校6年まで、グラフとしては他の学校でもこのような傾向は一般的だが、中学校になるとグラフが極端に変化しており、市長が言うように、いわき市の課題が表れている。
- ・これを見ると、中学校の先生から小学校の先生に対し、しっかり基礎を教え、学ばせるという話が降りてきて、今度、高等学校では、中学校にもう少し基礎を教えるべきと、このような順序になってくるのではないか。
- ・先生は、これをどのように解決し、このグラフをもう少しスムーズなグラフにしていくかということだが、私個人としては先生が生徒に心を通じさせないと、生徒は伸びないと思う。
- ・生徒に対する愛情、我が子よりも生徒を愛する先生の基本的な気持ち、このようなことが、これから成績を向上させるうえでは、重要ではないかと思う。
- ・生徒に対して、課題を与えないと伸びる率が非常に小さくなると思う。
- ・課題を与えることは、先生の負担が大きくなる。
- ・方法としては、課題を自分で選択させ、先生の負担を少なくし、その結果を先生方が判断し、生徒指導していく方法があると思う。
- ・例えばスペインなどではIQをある程度伸ばすのに50年かかる事例がある。
- ・極端に成績を上げることは非常に難しいため、これを急速に行えば、ゆがみが生じる恐れがあり、このようなことは避けなければいけない。

【市長】

- ・小学校の算数から中学校の数学の調査について、平成31年から令和4年の間、同じ生徒の伸びなどを比較しているが、市全体、学校ごとに全然違う傾向が見られ、中1、中2、中3の各段階における積み上がりなどの要因分析が必要だと思っている。

【高橋教育長】

- ・馬目委員のご指摘のように算数、数学という教科の特性もあると思われる。
- ・いわき市だけの話ではなく、全国的な話だが、算数及び数学は、得意、好き、または関心があるという気持ちなどが大きく成績へ繋がる教科の一つである。
- ・一方で国語は、国語が嫌いな子どもでも比較的成績がとれる教科であり、相関が無く、または弱い教科である。
- ・算数、数学のポイントは、ある意味逆の言い方をすれば、なるべく嫌いにさせないのが、学力の面では重要な教科だと思われる。
- ・ただそれがなかなか難しく、積み上げの教科のため、抽象的な概念が出てくる小学校高学年や、さらに中学校の高度な内容になってくると、つまずいてしまい、一度つまずいてしまうとなかなかその先を学ぶのが難しいところがある。
- ・鎌倉では、算数、数学の授業の様子を見ると、子どもたちの進度が違うため、先生の一律の授業の話をなかなか聞けない状況が見受けられる。
- ・そこでタブレットや様々な IT などを使いながら、いかに個別最適な学びを実現していくかが、鍵になると思っている。
- ・全国でも個別進度学習や自由進度などを進める授業スタイルも増えており、そのようなことをチャレンジする先生が鎌倉でも出てきており、そのような先生の取り組みを横で繋げて、サロンのような場も生まれたりするので、関心がある先生がいわき市にいたら連携したいと思っている。
- ・委員から話があったように信頼関係や愛情を持った接し方も非常に大事であり、教師の子どもに対する対峙の仕方は根幹に関わる場所だと考えている。
- ・心理的安全性のある場に教室がなっていること、間違っても大丈夫とか、失敗しても次のチャレンジができる、そのような教師と子ども、または子どもと子どもの信頼関係が構築されている学びの場にしていくのが重要であり、そこが学力にも影響するような研究も多数あることから心理的安全性は、学びのうえで重要である。

【小峰委員】

- ・私は現場で教師をしていたが、全国学力調査のこの数字が独り歩きするのが、非常に怖いというような話を聞いたことがあり、この全国学力調査が始まったときは、日本の学力の傾向を知ろうということで、当時始まったと認識しているが、このように数字や県の順位などが出てくると、そればかりが独り歩きしてしまい、教育の目的がどこにあるのか、とても心が痛くなる。
- ・昨年から、いわき市では学校カルテを作成しているが、いわき市は広いの

で、子どもの実態、地域の実態、学校の実態、そういう違いが非常に多く、それぞれの学校の実態をよく見てスタートするのは、とても大事だと思っている。

- ・先生方は日々、目の前の子どもたちと接しているので、いろいろなデータを分析するのは、難しいことだと思うので、専門の業者に、データを分析してもらうことは非常に良いことであり、データや数字などをクロス集計し、今後どのように活用していくのかが一番の鍵だと思う。
- ・日本では、一斉指導の中で、子を活かしていくというようなところも、非常に良いところではあると思うので、その一斉授業の中でどのように改善していけばいいのか、先生方が一番悩むところだと思う。
- ・一生懸命勉強している中で、なかなか子どもたちの情意面であるとか、数字（成績）にはね返ってこないとき、客観的にデータを見て、指導主事の方やアドバイザーの方が指導していく体制は非常に大事だと思う。
- ・どのように改善していくか、改善後、どのように反映されてくるかなどの検証などは、とても大事な試みであり、とても期待している。
- ・先生方の目の前の子どもたち一人一人の力を高めたいという願いが一番であり、それが実際にどのように高まり、どのように情意面でやる気が出てきたのか、はね返っていくのかなどをデータ分析し、先生方のやる気につなげてほしい。

【市長】

- ・データ分析や実態を把握した上でどのように活用していくかがポイントだと思っている。学力向上チームの先生からも、今どのようなことを行っているのか報告してほしい。

【学力向上チーム】

- ・今回の夏休み中に、学校現場の先生に我々の取り組みや様々なデータの見方について説明し、その評価シートが戻ってきたが、すごく新鮮だったという感想があり、やはり小峰委員が言われたように、現場の先生が結果の数値ばかりに目がいってしまい、それがプレッシャーになってしまうのではないかという不安があったが、その資料の背景や見方について先生方と一緒に話したり考えてみると、先生方も非常に興味を持っていただいているものと実感した。
- ・データをどのように活用するかという視点、高橋教育長のお話にあったとおり、対話が増えて、学校現場にいろいろな話し合いが生まれたりすると嬉しい。
- ・先生方とお話しした際、その時のキーワードとして、成果ファーストでデータを見ようという話があり、大変、先生方から好評をいただいた。
- ・今まではデータの結果が出ると必ず課題を探そうとしていたが、そうでは

なく、データの中から自分達の取り組みの良さ、成果の有無などが、やる気へ繋がっているものと実感している。

【宮澤委員】

- ・私は思春期の中学生の娘を持つ母親で、このような場でお話を聞かせてもらい光栄である。
- ・専門的な話を PwC の林さんからお聞きしたが、最前線の素晴らしいものを導入し、子どもたちの学力向上を見える化し、非認知能力も底上げし、みんな子どもたちを上げていきたい、生きる力を育てていきたいという取り組みをいわき市がやっている。
- ・これらから、学力向上アドバイザーの先生に参加いただき、徐々に精度が高まるものと期待しており、本当に子どもたちが幸せだなと、いわき市に生まれてよかったなと思っている。
- ・皆様がお話したとおり、現場のやる気、それと教育的な愛情、地域の実態、家庭の実態というもの、高橋教育長から学力向上の要因のお話があったが、様々なものが複雑に絡みあって、一言ではなかなか申し上げられない課題ではあるが、教育現場も家庭もすべてにおいて、先ほど何回も話していたキーワードの「対話」というのが、やはり一番大事だと思う。
- ・管理職の先生が学年主任の先生や教科担任の先生、各クラスの先生などに、うまく円滑にコミュニケーションを取ることが大事であり、学校や家庭でも、対話があって、そこで初めて子どもたちが安心して学べる環境がつかれるのではないかなと思っている。
- ・PwC の資料 3 ページにおける本事業のねらい、先生方が自発的に主体的に回せるようになるとすごく成熟した教育になると思う。
- ・子どもたちの学力を向上するためのサイクルや自分の特性を知り、内省して原因が何かを知ってから向き合い、これから勉強をどのようにすべきか、これもまさに現場の先生も当てはまるものと思って感心していた。
- ・市学校教育課で作成した資料にユニバーサルデザインがあったが、この内容は、まさに現場でそのまま出来ることなので、すぐにでも取り入れて欲しい。
- ・特別支援教育に対してのユニバーサルデザインは決して特別教育に対するデザインではなく、教育の基本に必要な内容だと思っているので、そのようなものを現場の先生方にいち早く、出来るものから少しずつ取り入れて欲しい。
- ・最後に、先ほどから数学の学力の話が出ているが、私は小中連携が非常に大事だと思っている。
- ・中学校の勉強はどうなのか娘に聞いたところ、SNS の影響がものすごく大き

く、できる子もできない子もスマホを持っていて、ティックトックやインスタグラムなどを隠れてやっている子も多く、スマホなどから切り換える力、時間を自分で制御をする力がなく、集中力も散漫になりがちだと聞いた。

- ・数学を苦手とする生徒が、解けない問題に向き合ったとき、誰に聞けばいいのか、現場の先生に聞けばいいのか、クラス全員が心のある子ばかりでもないし、現場に根差した課題から吸い上げて、管理職の先生、担任の先生などは一生懸命に課題と向き合っているほしい。

【市長】

- ・今回、PwC で取りまとめるビックデータの中に、小学校から中学校まで追いかけた際、つまづいていない学校も市内にいくつかあり、また、SNS などを制御する力や定性的な非認知的な能力に加えた生活習慣のようなこともアンケートで聞いていくことから、優良事例のデータがピンポイントで判明すれば、そこを共通分析し、解析結果を市内に広げていきたい。

【PwC 林氏】

- ・委員の皆様から本当に温かい前向きな励ましのメッセージをいただき、改めて今後事業の重要性を再認識するとともに、いただいたアドバイスを踏まえてしっかりと前に進めていきたい。
- ・教育データの利活用は繰り返し申し上げたとおり、目的ではなく、あくまでも手段の一つである。
- ・もっと高度な教育の絵姿を描いていくためにそれを実現するための手段であり、日頃先生たちが目で見ても耳で聞いて、様々な形で子どもたちの状況を把握してそれを授業づくりに活かすという、その把握の手段が一つ増えることであるという、その位置付けをしっかりと、先生方とも共有しながら、いい意味で、先生たちの心理的ハードルを下げながら進めていきたい。
- ・教育データを利活用することで、最適な一斉授業でありながらも、より個別最適な授業づくりが可能になると思っている。

【高橋教育長】

- ・冒頭、市長も話していたとおり、教育政策には特性があると思っており、データをもとに教育委員会や学校に指示を出したとしても、弊害こそなくても何かが変わることはないと思っている。
- ・教育政策の特徴として、やはり学校発信の改革・改善でなければ、本当の教育改革は得られないと思っており、鎌倉市では、ピラミッド型の教育委員会から学校管理職、管理職から先生たちに降りていくような組織構造じゃなくて逆ピラミッドをイメージしている。
- ・頂点に子どもたちがいてそれを支える先生、それを支える管理職がいて、それを支える教育委員会がある組織構造をイメージしている。

- ・現場のためにデータを整理し、そのデータを活用しやすい状態にしてあげる。
- ・先生や校長が、そのデータをもとに学校運営や各授業を振り返る材料に使ってもらうのが本質だと思う。
- ・答えを教えることではなく、いかに深い思考や内発的な改善をしていくかの材料を与えていくということ、それが授業の改善と働き方改革というのが一体的になって進んでいくような形にしていくのが、あるべき方向性と思っている。
- ・生成 AI は非常にすごいスピードで進化している。
- ・AI の活用も考えていかないと思っており、子どもたちが使っているタブレットなどからデータを吸い上げて、AI が解析することができれば、子どもたちがテスト受けなくても、形成的評価をある程度できる状況が生まれてくる。
- ・通知表の所見欄なども事前に子供の情報をインプットし、チャット GPT に書かせてみると、クオリティの高い所見が出てくるかもしれない。
- ・このダッシュボードからまず第一歩を踏み出し、世の中のテクノロジーの進歩を見据えながら、次の打ち手も並行して考えていくのが重要だと思う。

【服部教育長】

- ・PwC 様、高橋教育長の視点は大変参考になった。
- ・昨年度からいわき市では、データを分析して学校カルテを作り、見やすいデータとして認識され、分析ツールが揃ってきたと思う。
- ・分析したデータをいかに読み解き使っていくか、使いこなしていくことが課題である。
- ・一方でメリットとして、今までは、平均値をもとに対策を講じてきたため、どこから何に手をつければいいのか、難しかったが、どこに力を入れればいいのかはだんだん見えてきて効率的になったと思う。
- ・今までは全体的な底上げを常に考えていたが、これからは手当てすべきところを重点的に支援することを打ち出していかなければならないと考えている。
- ・私も着任してから、できる限り学校現場へ行っているが、多くの授業を見ると、私の主観だが、中学校の段階になると、どうしても一方的な授業が多い印象がある。
- ・エビデンスとしてまだ出せないが、主観としては、まだまだ小学校に比べると、主体的・対話的な授業というのが、なかなかできてないと思われる。
- ・中学校においても先生同士で授業の見せ合いをしているところが、いわき市にもある。
- ・独自の取り組みとして、できるだけ家庭でも学習させようと熱心に取り組

んでいる中学校もあり、今回の学力調査の結果を見ても、そういう学校は、伸びている。

- ・データとの関連性をしっかり見ながら、いわき市の中でも素晴らしい取り組みをしている学校もあり、そのような学校の取り組みを市内に展開していくのが非常に大事だと思った。
- ・高橋教育長もお話しされていたが、我々の方から押し付けにならないように、対話をしながら、自発的に取り組んでもらうことが必要だと思い、私も6月からブログを始めた。
- ・情報発信ツールをうまく使いながら、校長先生や現場の先生をその気にさせるようなことをやっていきたいと思う。

【市長】

- ・本日は非常に充実した教育政策の発信、学力向上に関して、有意義な議論、意見交換ができた。
- ・PwC の林さん、高橋教育長、これからもいろんな形でご指導いただきたい。

3 閉会

【署名】

馬 田 恒 一

小 山 幸 美 保 子